

CURES Salon

移転をまえにして

林 宥 一

この夏、経済学部が法学部、文学部などとともに金沢市丸の内から市内の角間地区に移転する。新しいキャンパスへの希望や期待や自分なりの抱負がないわけではないが、何かわだかまるものが湧きあがるのも禁じえない。そのわだかまりというのは、色々な要素から成りたっている気がするのだが、その一つに、これまで僕自身が遭遇した学校の移転というものに対する個人的な体験があるように思う。

僕が最初に学校の移転というものを体験したのは、中学生のときだった。それまで僕の通っていた学校は、北海道の或る小さな村の1学年1学級の小中学校で、小学校も中学校も同じ校舎だった。しかし、中学生になったとき、この村が隣の町と合併して市制が施されたのに伴って、中学校が分離・統合して新しい校舎ができたので、そこへ通うことになった。中学3年の2学期からのことだった。統合された学校は1学年に4つもの学級があり、小学校から8年以上も一緒だった仲間バラバラになって、その4つの学級に所属することになった。僕はこの環境の激変についていけなかったから、この新しい学校にあまりいい思い出がない。

2回目は、北海道をとび出して「内地」の大学に入ってからである。入学したのは埼玉県浦和市にある埼玉大学。国電・京浜東北線の北浦和駅前にあったその校舎は、旧制浦和高校の木造の建物を使用しており、歩くとミシミシと音がした。だが、この大学に入学したときに既に移転が決められており、3年生のときにそこから数キロ離れた地区に新

しい校舎ができたので、そこに移ることになった。新しいキャンパスは木々も緑もなく、大きなコンクリートの箱がポツンポツンと置かれているだけだった。大学紛争の渦中だったからほとんど講義に出なかったが、このキャンパスにも親しめなかった。

もう少しまともに学問をしようと発奮して入ったのが、東京教育大学の大学院（文学研究科）だった。ここで3回目の体験をした。だが、周知のように、この場合は単純な移転ではなく、これまでの大学の廃学と新構想大学（筑波大学）の創設という性格をもった「移転」だった。だから厳密に言えば大学移転の体験ではなく、大学の「廃学」に遭遇したという方が適切であろう。「廃学」の決まったこの大学のある大塚キャンパスで、僕は、最後の大学院生として5年間を過した。家永三郎氏の『東京教育大学文学部』は、最後の1年の大塚キャンパスを、「人影もまばらに、墓場にも似た寂莫たる風景を見せていた」と表現しているが、確かにその通りだった。しかし「寂莫たる」という形容は、キャンパスの風景以上に、この大学の最後に立ち会った教官・職員・学生・院生の心象風景だったように思う。母校を失なうことによって受けたさまざまな不利益は、ここに改めて書くまでもないし、書きたくもない。

そして、ようやく職を得て赴任したのが、この金沢大学だった。1981年4月。樹々の鬱蒼と茂る城趾にあるキャンパスは、これまで僕が体験したどの学校よりも美しく、落ち着いているもののように見えた。だが、この大

学もこの年、城内部局は教養部を除いてキャンパス移転を決めていた。二度あることは三度、四度の如く、僕はまたしても移転に出会うことになった。

今では、僕は、この移転について色々な議論があったことを知っているし、そしてまた、そのことについて自分なりの意見も所有している。だが、今この紙面を借りて書いていることは、そのことに(無関係でないにしても)直接かかわることではない。冒頭に書いたように、移転を直前にして新しいキャンパスへ移ることになんとなく抵抗感を覚えざるをえない、その感情発生の個人的な由来を自ら尋ねているにすぎない。そしてそれは、こうして振り返ってみると、新しいキャンパスと校舎がつくれ、その代わり、自分が慣れ親しんだ場所が抹消されてしまうことを体験するたびに抱いたある種の「寂莫」の感情(大げさに言えば、一種の故郷喪失感、或いは自分自身のうちに蓄積されてきた「歴史」が、いろんなところで寸断されているような一種の不安定感)と同質のもののような気がする。

しかし、これは、僕だけの個人的な体験に根ざす固有な感情だろうか。例えばこれを、「故郷喪失感」と定義してみると、そのような感情体験は、おそらく、戦後40年以上の日本社会の中で生きてきた人々の大部分が、多かれ少なかれ経験してきたところのものではないだろうか。唐突だが、僕は、この文章を書きながら、「寅さん」の生みの親である山田洋次氏が次のように述べているのを想い出した。

人が成長する背後には、いつも変らない風景と、いつも変らない人間関係が必要ではないか。寅の故郷は葛飾柴又だが、彼がこの地を口にするとき、どれほど懐しい思いを込めていることか。寅はこう言うー俺の故郷は葛

飾柴又というところなんだ、古臭くて貧しいところなんだけれど、広々とした江戸川の流れがあって、帝釈天がある。そこで俺のおいちゃんとおばちゃんとさくらが、ケチなダンゴ屋をやりながら俺のことを待っていてくれるんだ、と。

寅は「お国自慢」がきらいだから「俺の柴又はいいところだ」などとは決して言わない。しかし、寅のこういう言い方の中には、照れながらもちょっぴりある種の誇りが交っている。それは何故かという、柴又は変らない、その風景と、その土地の人間関係は、いつ行っても変らないということに、彼がひそかな誇りをもっているからなのだと思う。

葛飾柴又は江戸川のほとり、帝釈天の門前町といういつも変らない風景、いつも彼のことを心配してくれる妹やその夫、おいちゃんにおばちゃん、お寺の和尚に隣の印刷会社のタコ社長、といった変らない人間関係をもっている寅は幸福な人間だと思う。しかし、現実には、寅のような故郷をもっている人間はまず皆無ではないか。故郷の山は変らない、というけれど、瀬戸内海に住む人の中には、山もけずられ、海も埋めたてられてしまった人々がどれほどいることか。故郷に帰るたびに、変り果てた姿を見てむなしさを感じるというのは、今の日本人の大部分だと思う(以上は山田『寅さんの教育論』の一節の要旨)。

教育・研究の発展・充実としての大学移転と寅次郎の変なノスタルジーを一緒にするなという声があるかもしれない。だが、それにしても、「すでにスマートな法文学部4階の校舎が建ち、その向うでは理学部・教養学部^(ママ)の合同校舎が、すでにコンクリート打ちを終えて、型紙をはがすばかりになっていた」という金沢大学のルポルタージュ(『朝日ジャーナル』1964・2・9)が書かれたのは僅か

20年前である。「新しい時代にふさわしい大学」というけれど、「変化」を「進歩」と誤認してはならない。そのときどきの変化に対応するだけでなく、変らざるものを求める姿勢が大学には必要だと思う。そのような姿勢がなければ、大学の自治というものも醸成されるヒマがないからである。成長にはある程

度の時間が必要だというのは普遍的なことだと思う。「葛飾柴又は江戸川のほとり」の如く、「われわれはお城のなか」という教養部の態度は、寅次郎なみの偏狭だという人がいるかもしれないが、それはそれで一つの理念として、まずは理解すべきだろう。

(金沢大学経済学部助教授)

Topic

フィナンシャルタイムズが紹介した 北陸の企業、そして原発問題

松田 弘子

ヨーロッパの有力経済新聞『フィナンシャル・タイムズ』（1989年5月23日）に、『HOKURIKU』と題する北陸地域の経済問題の特集記事が5面にわたり掲載された。

農業、工業、金融業、サービス業、その他幅広くとりあげ、各産業の現状や問題点、及び今後の展望等を、かなり綿密な取材をもとにレポートしている。YKK、小松製作所をはじめ、不二越、酒清織物、セーレン、日華化学など北陸の各企業が、経営の多角化、商品の高付加価値化、製品の変更に即対応できる生産組織の整備等、柔軟な経営方法と努力で国際的競争力を身に付けていることを紹介している。そして、過度の一極集中のため混雑している東京に比べ、まだ十分なスペースと資源に恵まれた北陸は、今後一層の発展が期待できる地域であると評価している。

さて、以上のような記事の中で、とりわけ印象的だったのは、『TAKEN ABACK BY WOMEN』（女性達に不意をうたれて）という見出しがつけられた、原子力発電所問題のレポートである。今、重要な争点となっている原発問題を、ロバート・トムソン記者は冷静かつ慎重に見据えており、価値あるレポートとなって

いる。

最近の全国的な反原発運動の盛り上がりのなかで、北陸でも、若い母親達が放射能による食品汚染への恐れから原発に強い不安を懐き、反原発運動の核となって活動している姿を伝えている。

彼女達に対し、必死で原発の安全性と必要性をPRする北陸電力については、原子力のコストが「水力発電より30%、火力発電より20%以上も低い」ことが原発推進の理由と紹介し、しかし、日本の36基の原発の今年の稼働率は一昨年より下がっており、「資源エネルギー庁は、その原因は定期検査が増えたこともあるが、故障・トラブルが増えたせいでもある」と説明したことを伝えている。

「反原発運動の正確な力を測ることは難しい。」としながらも、「4月の能登での市長選挙（珠洲市長選）で、原発反対派の二人の候補者が得た票を合計すると、原発推進派の現職市長の票より多かった。この選挙結果は、住民の原発推進政策に対する不満を明白に示す象徴といってよい。」と、トムソン記者は断じている。

(金沢大学経済学部助手)